

## ～日本語弁論大会 下関市長賞受賞者研修旅行記～

この旅行記は、2014年11月15日に中国・青島市で開催された第13回山口銀行杯日本語弁論大会（主催：青島市人民政府対外友好協会、株式会社山口銀行、後援：在青島日本国総領事館、下関市）で下関市長賞を受賞した学生が、2015年2月9日から16日まで下関市への研修旅行を体験し、その感想をまとめたものです。

研修旅行に関する2名の学生の体験記ならびに本市職員の同行体験記をご紹介します。

### 1. 夢のシティー———下関

中国海洋大学日本語学科 黄旭（コウ・キョク）

下関という地名と最初出会ったのは中学時代のことだった。教科書に記載された「馬関条約」はそこに密接している。中国の運命はその条約によって左右され、中日関係もそれから悪化した。その条約を結んだ中国側の代表———李鴻章と同じ出身地安徽省合肥市で生まれた私は、その時に、中国の運命を左右したところに行ってみたいという種を心に撒いていた。

2014年11月、青島で大学に通っている私は、「山口銀行杯日本語弁論大会」をきっかけに下関へ訪れる機会を得、2015年ちょうど春節の前の一週間に下関へ旅行をした。海の波間を36時間漂った後、定期フェリー「ゆうとぴあ」はついに下関港に到達した。それから、このシティーとの3日半の付き合いがはじまった。

自然を誇りとする下関で、最初に行った観光スポットは角島だった。田畑の風景と農家の家々は車窓に次々と退き、カラスたちは大きな翼を張って、青空を飛翔していた。青くて澄んだ海水は目の前で逆巻き、波が海岸を打つ音が絶え間なく耳に入っていた。それは角島であった。



その美しい自然環境と組み合わせるのは深さのある歴史である。雄大な赤間神宮で平家の物語を聞くと、彼らの勇敢さに感心したと同時に、安徳天皇及び平家の運命を惜しむ感情も湧き出した。長府庭園で着物を着ると、宮本武蔵と佐々木小次郎の時代に戻ったような感じもした。



そのように、3日半はあっという間に最後の日になった。海峡ゆめタワーや海響館、功山寺など、下関をほとんど全部回った私は、何か足りない感じがしていた。しかし、運命は奇妙なものだった。ホームステイ先のご家族がちょうど春帆楼に勤めているので、最後の日、一緒に中国の運命を左右したところを見に行った。

複雑な心情を持ちながら、春帆楼及び隣の記念館で見学をした。「時代に乗り遅ればひどい目に遭う」という意識はその条約から我々中国人はしみじみと感じていた。その信念を抱いて、強大な国家を求めはじめた。同時に、その痛みを感じたからこそ、平和は中国人にとって何より大切である。戦後の日本も平和の道を長く歩んできた。その平和の信念こそ中日関係を改善するポイントだと思う。

春帆楼を出ると、向こうは姉妹都市広場である。そこに、青島の名前を目立つところに書いていた。下関はこんな奇妙な都市である。ここから中日の距離は離れ始め、ここから中日の交流が盛んになった。

最後に、別れの時になった。また「ゆうとぴあ」に乗った私は、胸の中でいろいろと考えた。「ゆうとぴあ」はプラトンが描いた理想の国である。その国は現実に見付けられないが、人間の未来に対するすばらしい願いを含んでいる。中日の未来もそのような青写真がある。その夢は下関と青島が背負っているものであると同時に、我々青年の責任でもある。

## 2. 大切な思い出一下関の旅

中国海洋大学日本語学科 黄東懿（コウ・トウイ）

私は昨年11月に青島で行われた山口銀行杯日本語スピーチコンテストで下関市長賞を受賞したので、下関へ旅行に招かれました。今度は日本文化の中に身を置いて、いろいろな体験を通して、大切な思い出を作りました。とてもありがたい旅でした。

2月9日の夜11時ごろ、船は青島を発ち、そして30時間ぐらいの航行が始まりました。翌日の天気はよかったです。晴れ渡る青空に雲がぼんやりと流れているのを見て、限りなく広がっていく海を眺めながら、自分も海の一部になったような気がしました。11日の朝、目が覚めてカーテンを開けると、観覧車のようなものが目に映ってきました。「やっと日本に来た！ここは下関だな」とドキドキしながら思っていました。

初日は「世界の絶景」という角島大橋へ行ってきました。素晴らしい景色を見ました。色の深い海の中に浅く緑色の海が挟まれて、非常にキレイでした。そのあと、角島大橋を渡り海辺まで行ってきました。小鳥の叫び声に包まれ、白い砂浜を踏んで、下関ならではの自然環境の豊かさを初めて実感しました。

そして幸いなことに、その日はちょうど「ふくの日まつり」でした。学校にいた間に下関で生活していた先生はよくこのふくを紹介してくれただけに、「ふくの日まつり」に間に合って、本物のふくに会って、一層嬉しくなりました。そこで、かわいいイルカの着ぐるみと一緒に記念写真を撮りました。案内をしてくれた国際課の木下さんから、その中に入っているのは全員公務員だと聞き、びっくりしました。

その後、みのりの丘で豆腐作りを体験するときも、長府庭園で着付けを体験するときも、すみずみまで日本独特の美が溢れているように、その丁寧さにつくづく感心させられました。



最後の夜はホームステイ先で過ごしました。ずっと普通の日本家庭生活に憧れていた私は、今度のホームステイをきっかけに、一つの夢を叶えました。ホームステイの家族に心より感謝しております。

ホームステイの予定を聞いて、最初はすごく緊張していました。私はもともと内気なので、「ありがとうございます」とか「お世話になりました」とか、このような大切な言葉はよく自然に口から出てくれないので、「もし、失礼になったらどうする」と、そわそわしていて、不安でした。けれど、奥さんにお会いしたあと、話しているうちに、感謝の言葉もお願いの言葉も、だんだん自然に言えるようになって、緊張感もそれにつれて少しずつ消えていきました。

ホームステイ先の家は私の故郷ではあまり見られない1戸建てで、とてもかわいい建築でした。夜、自分もその家族の中に溶け込んだかのように、みんなで一緒に手を合わせて「いただきます」と言ってから、和やかな雰囲気ですごした。お風呂に入る前に、奥さんはお風呂の入り方を教えてくれて、大変いい勉強になりました。

そして最後、娘さんと一緒によく見ていたあの観覧車に乗りました。日当たりのいい場所に座って、光が差し込んで、夏だと錯覚してしまうぐらい、この季節の暖かさを改めて感じさせてくれました。

アニメに夢中になったのがきっかけで、日本語が好きになりました。一つ一つの言葉を友達のように覚えてきました。けれど、今回の旅行は言葉を通じて、たくさん人との触れ合いで、日本社会、日本文化を感じる事の大切さを教えてくれました。この大切さは一生忘れられないでしょう。



フェリーに乗る前に、木下さんとホームステイの家族が全員見送りに来てくれました。お別れのあと、下関国際ターミナルを出て、ひたすら前に歩いてみたら、左側からなにか音がしたように感じて、視線を巡らすと、その真っ暗なガラスを隔てて、みんなが私たちに手を振っているように見えました。次の瞬間、じんと胸にきて、涙も溢れてしまいそうになりました。

下関へ行ってよかったです。

今後はこの感動の思い出を連れて、日本語を勉強していきたいと思います。

### 3. 山口銀行杯日本語弁論大会 下関市長賞受賞者下関市研修旅行

下関市総合政策部国際課  
青島市派遣職員 木下 清治

中国の学生たちが下関市を訪問するきっかけとなった日本語弁論大会は、山口銀行が主催して1992年に始まり、今ではすっかり恒例行事となった青島で最大規模のスピーチコンテストだ。今回、このスピーチコンテストに下関市・青島市友好都市締結35周年記念として下関市長賞を設け、中国海洋大学の黄旭（こう きょく 男性 3年生）くんと黄東懿（こう とうい 女性 2年生）さんが、見事この賞を獲得した。

中国海洋大学というと中国の中でもレベルの高い国立大学として有名だが、この中国海洋大学において、特に黄旭くんと黄東懿さんの凄いところは、二人の日本語勉強歴が非常に短いところである。二人とも大学入学後に勉強を始め、それぞれ2年間と1年間という短い期間で、日本語のレベルを向上させ、大学の代表に選ばれ、ついにはスピーチコンテストで下関市長賞を獲得した。これは、語学の勉強をしたことがある人であれば、どれだけ凄いことであるか想像できると思う。このように非常に優秀な学生が日本に興味を持って日本語を勉強してくれていること、また、このような優秀な学生に日本に実際に来て本当の日本を知ってもらおう機会を設けられたことに嬉しさを感じる。

実質三泊四日という短い間に「下関らしさ」を体験してもらうため、できるだけ多くのところを回った。日本に到着して直ぐにホテルに荷物を預け、南風泊市場で行われていた「ふくの日祭り」に出掛けた。急いで行ったにも関わらず「ふく鍋」は、私たちの目の前で無くなってしまったが、それでも「河豚の刺身」や「河豚のから揚げ」などを食べる事ができた。中国人の中には、刺身など生ものが苦手な人もいたので少し心配していたが、下関の海の幸は彼らの口に合ったようであり安心した。

南風泊で舌鼓をうった後は、綺麗な景色を見ようということで角島に向かった。青島にある栈橋は、世界的に有名な青島ビールのラベルに使われている。青島は、それほど中国で海の街として知られているが、角島につながる橋に着くと、学生たちはその光景に感激し、記念写真を多く撮っていた。その後、その橋を渡り、角島で昼食をとり、塔や砂浜をゆっくり楽しんだ。

夕方になり陽も傾き始めたころ、来日初日であるが、お土産を探しに、ゆめシティーに向かった。ゆめシティーでお土産を探し、続けて大丸に向かい、中国人の「購買意欲」、身内等にお土産を買わなければならない「義務感」に改めて驚かされたが、学生から「瀬祭が日本で一番おいしいお酒と聞いたので、買って帰りたい！」と言われたときは、本当にビックリした。

大丸でお土産を物色している途中で「瓦そば」を見掛けたため、夕食は「瓦そば」を食べようということになった。食事のとき、学生から「日本では、食事のとき料理は残したほうがいいですか？」という質問を受けた。そこで、「中国では料理を残すのが礼儀だけど、日本では残さないのが礼儀だよ。」と答えると、「瓦そば」を残さず食べてくれた。

二日目は、同じく韓国で行われた日本語スピーチコンテストで下関市長賞を受賞した韓国人の学生と合流し、豊田町にあるみのりの丘で「豆腐作り体験」を行い日本の味を自ら作る体験をしてもらった。その後、「豊田道の駅」で昼食を取り、「住吉神社」に寄った後、「梅光学院大学」で「学生交流」を行った。

「梅光学院大学」では、10名ほどの梅光学院大学の学生たちが玄関で出迎えてくれた。大学の中を案内してくれた後、日中韓の学生みんなで「百人一首」を行った。「百人一首」は、通常のものとは違い、ゲームをしながら各都道府県の特徴を勉強できる「都道府県百人一首」というものであった。ゲームに興じている学生たちを見ながら、若者の打ち解ける早さに驚きを感じた。やはり、楽しい時間は早く過ぎるもので、あっという間に終わりの時間を迎えた。別れの時に、学生同士で連絡先の交換を行い、中国・韓国での再会を誓っていた。その後、下関市として彼らの歓迎会を行い、「海峡ゆめタワー」で下関の夜景を楽しんでもらい、二日目のスケジュールを終えた。

三日目は、「和服着付け体験」、「長府散策」、「唐戸市場」での昼食、「海響館」見学、「山口銀行」表敬訪問、「赤間神宮」見学、と慌ただしくスケジュールをこなした後、研修旅行のメインイベントである「下関市長表敬」を行った。事前に学生たちに、日本語で1分間程度の自己紹介をするよう伝えていたのだが、流石、「下関市長賞」を獲得した学生たちである。自己紹介を流暢にこなし、その後の市長との歓談でも、日本語で全く問題なく会話をしていた。

「市長表敬」が終わった後、学生たちにとって残すイベントは「ホームステイ」だけとなった。ホームステイ先のご家庭に市役所まで学生たちを迎えに来ていただいた。実は、学生たちが一番心配し、緊張していたのが、この「ホームステイ」であった。その理由を聞いてみると、ホームステイ先に「失礼なことをしはしないか」ということであった。私には、彼らのこのような考え方が非常に日本人ぽいように感じられた。

「ホームステイ」は、一泊二日と非常に短い時間であったため、翌日の夕方、学生たちを中国へ見送るため、東大和町の国際ターミナルに行き、ホームステイ先のご家族に連れられてくる学生たちを待った。学生たちが来た後、それぞれのホームステイ先に、学生たちが各家庭でどのような様子であったか尋ねてみた。学生たちの心配は杞憂であったようで、両家族とも学生たちの満足度は高かった。受け入れ先の家族としても、国際理解をより高めることができたので、「ホームステイ」を受け入れて良かったと言っていた。

今回、日本を訪れた中国の学生たちは、実際に日本に来て、直に日本を見て、素の日本人と交流して、きっと下関のファン、日本のファンになってくれたに違いない。また、彼らに関わった私たち日本人の方も、中国に対して良い印象が増したと思う。現在の日中間の関係は決して良いとは言えないが、今回の研修旅行は、今後の日中関係に対してプラスの効果をもたらすことができたのではないだろうかと思う。